

## 昭和の東南海地震体験談

氏名：楠本 正俊(くすもと・まさとし)

生年月日：昭和6年12月5日

地震を体験した場所：那智勝浦町

当時の家族状況：父(出兵の為不在)母、弟4人、妹1人



### 1)地震発生時の状況

当時、13歳で現在の岩出町にある紀北農業学校(現、那賀高等学校)の学生だったが、体をこわし、郷里の勝浦に戻っていた。当日、1歳の弟を子守ついでに天満の祖父の家へ遊びに行っていた。昼食後、13:00から13:30頃だと思いが、弟と従兄弟の子供たち4~5人で近くの麦畑で遊んでいると、立ってられない程の揺れがあり、思わず畝にしがみついた。しがみつくも、体は自由が利かず、はじき飛ばされるほどの激しい揺れだった。

### 2)津波襲来時の状況

「稲むらの火」の話から、地震の後は津波が来ることを既に知っていた。祖父の家に戻ろうとすると、若い男の人が「津波やぞー」と叫んでいた。



(↑写真 避難した所から見た現在の天満地区と那智湾)

一方、須崎地区は民家が50件ほどあり、そこでは寺の屋根がぼっかり浮いていて、その隣にある牛小屋からは牛が流され、ぷかぷか浮いて泳いでいた。住民は那智中学校裏山にも避難したと聞いている。

観光棧橋の前の浜が、底が見える程、潮が引いていくのを見た年配の人がいる。津波は那智川の上まで上がっていったそうだ。子供心に、余震からまた大きな地震がくるのではと思い、それがいちばん恐ろしかった。津波は現在の国道42号線あたりまで上がった。

### 3) 家族の行動・被害

自分は祖父の家に行っていたので、母親がどのように避難していったかまでは記憶にない。家族は皆無事だったが、魚屋を営んでいた自宅の柱は津波でもぎ取られ、あえなく倒壊した。

### 4) 集落・周囲の被害

那智湾から入った津波が現在の国道 42 号線沿いの那智中学校付近まで乗上げ、返す波が海拔の低い勝浦方向に進路を取ったため、多大の被害をもたらした。

天満の桜道の踏み切り近くにあった 4~5 軒の家や青果市場が流され、同時に近くの線路も、もぎとられ、鉄道は不通になった。水死した人も何人か見た。その中には築地にあった、パン屋の 5~6 歳の娘もいた。その娘は 1 週間後くらいに、船から引き上げられ、着物を着ていたこともあり、まるで人形のようなだった。この娘のもう一人の兄弟も津波で流され死亡している。

### 5) 地震・津波後の生活

家は住める状態ではなく、天満で広い屋敷を持っていた知人宅でしばらくやっかいになることになった。余震が何度もあったが、裏手が山で、すぐに逃げられるという安心感もあった。この時、一人だったのか、家族の何人かがお世話になったのか覚えていない。食べるものは殆んど無かったが、周りの助けで何とかしのぐことが出来た。

後に、町営の仮住宅が建てられ、移り住むことが出来た。とにかく男手が兵隊に取られていたため、少なく、行方不明者の搜索や倒壊した家屋や町の修復が思うように進まず、復旧にかなりの時間を要した。津波も強烈だったが、空襲から逃れるため電気を消せなければならず、不便で厳しい生活を強いられた。

### 6) 次の災害への備え

国の救援物資をヘリコプター等により運搬がスムーズに行われると想定しているので、特に非常食や防災用具の備蓄は必要ないと考えている。津波襲来時は、ひたすら山に、少しでも高いところに避難することが肝要であると考えている。仮に夜、地震や津波があったら、避難の遅れ等で被害の拡大は必死と懸念している。

### 7) その他

南海地震は津波の被害もなかった為、記憶は全然ない。